
相合傘にあながあいた日

高槻 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相合傘にあなたがいた日

【Zコード】

Z6583K

【作者名】

高槻 雅

【あらすじ】

ありふれた日常。ありふれた人間。ありふれた言葉。自分を取り巻くそれらに、もう、何の感情も抱かなくなつた。平野悠香は死んだ目をした高校生。そんな彼女のもとへ、長い間音信不通だつた幼馴染みの少年から突然、連絡が入る。そして謎の力を操り「もの探し」を仕事にしている怪しい少年を居候うことにして、

〇〇プロローグ

その日は土砂降りの雨。空が不機嫌な日だった。

雨粒が窓を打つリズミカルなBGMに耳を傾け、心までも洗われる様な気になりながらガラスを伝つていく雨を眺めていた。

何を考える訳でもなく、頬杖をついてただそうしていた。

幼いというのは罪なもので、時間など気にせず、自分のしたいように毎日を過ごせば良い。そうしても誰にも怒られない。幼いから。当時5歳だった私も雨が降る度に一日をぼーっと過ごしたものだ。叱られないのを良いことに。

今日もまた一日そんな風に終わるのかと窓の外を見ていると、私の目に興味深いものが飛び込んできた。

私は窓ガラスに顔をくっつけ、まじまじと興味深い何かを見つめた。何かは、この大雨の中で傘もささずに私の家の庭でしゃがみ込む男の子の姿だった。

私は一人で首を傾げる。

まだ小さかった私はその男の子を助けてあげようと考へた。どんな理由で雨に打たれているのかは分からぬが、このままだと風邪をひくかもしれない、私はそう思つた。

せめて傘だけでも届けてあげよう。

私は部屋を飛び出した。

短靴を引っ掛け、玄関の隅に置いてある華奢な傘たてから青い傘を引き抜く。

これは私のお気に入りであり、独特的の色が好きだった。

薄い青というか、白を加えて薄くした色とはまた違い、水で薄め続けたような青色だった。

まるで、雨に打たれて色が抜けていったような不思議な色だった。

私は傘の柄を握り締め、外へ駆け出した。

走ると、水溜りの水がはねて短靴などひとたまりもない。
靴の中まであつという間にびしょびしょになった。

でも今はそんなの気にしてる暇はない。

早く行かないと。

私は異次元へ通じる扉へ向つて走つている気分だった。
一刻も早く男の子のところへいかなければ男の子はいなくなつてしまふ気がした。

漫画の世界でだつて扉はすぐに消えてしまつでしょ?
足がもつれながらも私は走つた。
そして足を止める。

男の子は私の気配に気付かずにしゃがみこんだまま。
私は何も言わないまま男の子の背後にたつた。

男の子の背中は小さく細く、着ているTシャツはすっかりぐしょぐしょで肌にはりつき、いたいけに浮かび上がつてている背骨を目立たせている。

私は俯きながら傘を開いた。
その弱々しい背中を

0-1 桜並木を抜けて

暖かくて優しくて、だからこそ残酷な季節、春。一体どれだけの人間が期待に胸を躍らせ、それを裏切られているのだろうか。

人は春という季節にたくさんのことを見みすぎている。望むから絶望するのだ。

何度も学習すれば分かるんだ。絶望するのはもつ嫌だ。だから私は何も望まない。

平野悠香は桜並木の道を歩いていた。

まわりには同じ制服を着た生徒が溢れている。

それぞれ思い思いにグループを作つて話を盛り上がらせていたり、一人で音楽を聴いていたり、様々だ。

確かにそれらしき雰囲気が流れているが、みな多少の絶望を抱いているのが感じ取れる。

爽やかな4月だというのにべつたりとくつついて歩く男女の組以外は。

悠香は憂鬱な気になる人間觀察をやめにし、空を見上げた。木々の間から覗く太陽は柔らかく照つていて、まさに春だ。時々、桜の花弁も降つてくるところがわざとらしいが。やはり、誰もが春の碧空に騙されたか。

そして騙されていたことに今さら気付き、絶望している。

新しい出会い、新しい環境、新しいものは必ずしもいいものじゃないつてことに。

意外と面倒で居心地の悪いものだということに。

しかし、人間とはばかなもので、来年の春にはまた期待を抱くのだ、新しい季節に。

悠香は今月から高校生になった。

だからといって、生活にほとんど変化はない。

高校生活には特にこれといった期待もしていないし、今は見慣れない風景もすぐに当たり前に戻るだろうからだ。

日常に飽きたと考えることに飽きた。

悠香は桜並木を抜け、自宅とは反対方向の街の中心部に向っていた。
まだ新鮮な日々を求めていた頃、毎日のように繰り返した行動だ。

今はもう、飽きた行動だ。
ならば何故、そうするか。

悠香は呼び出されていた。

ずっと音信不通だった幼馴染みに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6583k/>

相合傘にあながいた日

2010年10月11日13時13分発行